経　済　学

坂本武人著

三和書房

経　済　学

昭和51年4月10日　初版印刷
昭和51年4月20日　初版発行　　定価　1800円

著　者　坂本武人
発行者　田中健次
印刷者　大谷末吉

発行所　株式会社　三和書房

京都店　京都市中京区木屋町通三条下ル石屋町123
東京店　東京都千代田区神田神保町1ノ20鯨井ビル

（大谷印刷株式会社・印刷）

はじめに

「あなたのおしあわせを心からお祈りいたします」私たちは親友や知人に対して手紙を書くとき，あるいは暫くの別れを惜しむとき，このような言葉を文字に表わしたり，口にしたりします。

「しあわせ」な生活は，実に，私たち全ての人間に共通する願いであり，祈りでもあります。それ故，近代社会にあっては，全ての人がよりしあわせな，よりよい明日の生活を願い，それを実現することを基本的人権として認めています。

学問とか，真理と呼ばれるものも，広くこのしあわせな生活の実現を目指して探究されているものであり「どんな学問でも，究極においては，生活のために奉仕するものでなければなりません。あらゆる学問は，生活のために役立つとき，はじめて，その存在理由を充たすものであります」（宮田喜代蔵『生活経済学研究』）とさえいわれています。

今，私たちが研究を始めようとしている経済学も，結局は，商品という物をさしはさんで，人と人との交わりとして現われる経済現象の中で，しあわせな生活がどのように位置づけられ，規定されているかを明らかにする学問であるということができます。

では，私たち人間にとって，「しあわせ」な生活とは，いかなることがらでしょうか。これを解明するには，別に一つの学問体系がうち立てられねばならないほど，深く，広い意味を持っています。しかし，私は，それを一口で，「自由」な生活という言葉に置き換えることができると考えます。

私たち人間は，その長い歴史の中で，いろいろな形での束縛や不自由を

体験し，その中に不しあわせを感じ，それから自由になることに，しばしば，しあわせを体得してきました。

では，私たち人間を束縛し，不自由におとしいれるものは何であるか，それには大きくわけて二つのものが考えられます。一つは，個々の人間の内にあるもの，すなわち，「原罪」とか「業」とか「我執」とか「欲望」と名づけられるものであり，今一つは，個々の人間の外にあって，人間を規定しているものです。そして，この外なるものは，更に三つに分類することができます。第一に人類が誕生する前から存在していた自然現象と名づけられるものであり，第二は，社会現象と呼ばれる，他者およびその交わりの中に起こってくるもの，第三は，文化現象と考えられる人間のつくり出したものです。

前者，すなわち，自らに内包する束縛要因からの自由のためには，通常，人は宗教とか倫理・道徳といったものの力に頼る場合が多く，後者，すなわち，外なるものからの解放を求めて，人は科学を用います。自然の束縛要因を明らかにするために自然科学を，人と人との交わりの中で起こる束縛原理の発見を目指して社会科学を，人の創り出した文化を生活に一層役立てるべく，その法則性の解明を求めて人文科学を確立してきました。

経済学は，このような人間の自由を求めるもろもろの科学のうち，人々の生活をよりよくするための財貨・サービスを調達するに当たって，人と人との交わりの中かから起こる束縛要因をたずね，人々に自由への道すじを提示することに主たる役割を持つ社会科学の一分科であります。その意味では，すぐれて人と人との係りに関する学問といえます。それ故，「経済学はその出発点も到達点も共に人間であり」(Wilhelm Roscher)，人間の自由の原理を探し求めるものであるといわれています。

このように見てくると，いやしくも，人間としての成長を求め，広く経

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

済生活の安定と向上，その自由の確立を志す者にとって，経済学は必ず修めなければならない学問の一つであるといえます。

私は，この本において，科学的生活理論の確立を目指しながら，私たちの今住んでいる社会の中で，経済生活を営む人間がどのように取り扱われ，どのように規定されているかを，マーシャルにならって，「人間に対する暖かい心 warm heart と，事実に対する冷静な判断 cool head」をもって明らかにしていきたいと考えています。

この本がこのような形で生まれるためには，すでに私のまわりには，経済学についての多くの専門的研究者ならびに諸先生の研究の積み重ねがあったことを記し，これらすべての方々に感謝の意を表わします。わけても，恩師住谷悦治教授の暖かい励ましと御教示がなければ，この本，いな私自身すら今あるような形で存在しなかったと思われます。また，極めて困難な出版事情の中で，この本の出版をすすめてくれた三和書房社長田中健次氏に感謝します。多くの方々が私自身の今後の成長のためにも，きびしいご批評を下さることを切望します。

昭和51年1月

坂本武人

目　次

はじめに

第1章　経済学の対象と研究方法 …… 1

1.　経済学の対象…… 1

2.　経　済　生　活…… 4

3.　経済学の研究方法…… 8

第2章　経済生活の歴史 ……14

1.　経済生活を動かすもの……14

2.　原始共産制社会……16

3.　奴 隷 制 社 会……19

4.　封 建 制 社 会……21

5.　資 本 制 社 会……25

第3章　経済生活の原理 ……29

1.　生産および消費活動……29

2.　資本主義の精神……32

第4章　商 品 の 生 産 ……37

1.　商品とは何か……37

2.　商品生産の無政府性……42

3.　価　値　法　則……44

第5章　価　　値　　論 ……48

1.　労 働 価 値 論……48

2. 効用価値論……54

第6章 貨幣経済……58

1. 貨幣の発生……58

2. 貨幣の機能……60

3. 貨幣制度……62

4. 預金通貨・信用創造……68

5. 手形・小切手……71

6. 貨幣学説……72

第7章 企業と資本……74

1. 企業の形態……74

2. 企業形態の変化……78

3. 資本の循環と増殖……79

4. 利潤の創出……82

5. 利潤学説……86

第8章 価格……90

1. 価格機構……90

2. 需給の法則と市場価格……96

第9章 市場……101

第10章 賃金・地代・利子……117

1. 労働者の価格(賃金)……117

2. 土地の価格(地代)……121

3. 貨幣の価格(利子)……127

第11章 所得と分配……132

1. 所得と収入 ……132
2. 所得の発生 ……133
3. 所得の分類 ……135
4. 所得の分配 ……138
5. 所得分布の理論 ……141
第12章 消費と国民生活 ……144
1. 消費と貯蓄 ……144
2. エンゲル法則 ……148
3. 消費の社会性 ……150
4. 消費支出の変化 ……152
5. 消費の平準化 ……154
第13章 国民所得 ……157
1. 国民所得の概念 ……157
2. 国民所得とその類似概念 ……161
3. 国民所得の分析 ……165
第14章 経済の成長と発展 ……167
1. 産業構造とその発展 ……167
2. 生産部門の関連と再生産の法則 ……171
3. 経済成長・進歩・発展 ……173
4. 資本の集中(企業の集中)と集積 ……180
第15章 金融と財政 ……189
1. 金融機関 ……189
2. 金融市場 ……194
3. 財政 ……201

第16章　恐慌と景気変動 ……207
1. 恐　　慌 ……207
2. 景気変動の歴史的形態 ……209
3. 景 気 変 動 論 ……213
第17章　物価とその変動 ……222
1. 物　　価 ……222
2. 物価指数の作成法 ……224
3. 物価指数の種類……226
4. 物価の変動要因……229
第18章　国　際　経　済 ……234
付　録　経済学の歴史 ……242
1. 経済学の成立とその歴史の意義 ……242
2. 重　商　主　義 ……247
3. 重　農　主　義 ……248
4. 古典学派(正統学派) ……249
5. 歴　史　学　派 ……252
6. 限界効用学派 ……254
7. ローザンヌ学説 ……256
8. 新 古 典 学 派 ……256
9. ケインズ学派 Keynsian School……257
10. その他の近代経済学派 ……258
11. 社会主義諸学説 ……259

第1章　経済学の対象と研究方法

1. 経済学の対象

アンデルセンの名作「マッチ売りの少女」の女の子は，何故，幼い手で雪の降りしきる夜の町を，飢えて寒さにふるえながら，マッチを売って歩かねばならなかったのでしょうか。

経済学はこのような問題について考える学問であります。その場合，ごく常識的には，この女の子が，どうすれば（how to）飢えと寒さから逃れ，暖かい部屋で楽しく充ち足りた眠りにつくことができるかの手段・方法を教示する学問と考えられています。しかし，私たちが今から研究して行こうとしている経済学は，このような生活技術に関するものではなく，何故（why）この女の子は飢えと寒さにふるえながら，独り雪の中で死んで行かなければならなかったかを，女の子が置かれている生活基盤に即して，原理的に考えて行くものです。

言葉を換えて説明すると，経済学は，現実に，ある人は飢えと寒さにふるえながらの貧しい生活を営んでいるのに対し，他の人は，充ち足りたたのしい豊かな生活を送っているのは何故か，また，ある時は，1片のパンを得るために法を侵すといった，せっぱつまった暮らしをしているかと思うと，ある時は飽食暖衣，必要以上のものを摂取するゆとりのある暮らしを営むことのできるのはどうしてであろうか，このような，人間の経済生活と呼ばれる現象が如何なる原理によって導かれるかを解き明かして行く学問といえます。

すなわち，経済学の研究対象は経済生活であり，その中で起こる人間の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

幸・不幸の原理を明らかにすることであります。ところで，私たちの経済生活において，それをゆたかにし，しあわせに導いて行くものは何でしょうか。

いうまでもなく，それは現在および将来の生活を営んで行くに必要とされる衣食住その他の生活資料の大きさであります。人は，その生活において，一定財の財貨を消費することなしには，生きて行くことはできません。そして，その必要とされる生活資料の少なさの故に，しばしば，貧困や不幸を体験し，不満を表明します。

それ故，ゆたかな，不満のない経済生活を送るためには，絶えず，生活に必要とされる物資が充分に存在していなければなりません。

しかし，そのようなものを，私たちは手をこまねいていては，得ることはできません。それを自分のものにするためには，自ら立って資源を持つ自然に働きかけ，それを獲得するよう努力しなければなりません。すなわち，「稼ぐに追付く貧乏なし」で，働く（稼ぐ）ことによって，私たちは貧しさから脱け出すことができるのです。少なくとも，貧困からの自由を得ようとするならば，私たちは，イソップ物語の，「ありとキリギリス」におけるありのように，先ず，働かなければなりません。

このように，経済生活をゆたかなものにするための基本的な条件は，働くことにあります。けれども，私たちの社会では，「働けど働けど猶わが暮らし楽にならざり，じっと手を見る」と啄木が歌ったように，がむしゃらに働くだけでは，生活は必ずしも安定しないのであります。

もし，働くことだけで，私たちの経済生活が安定するならば，経済生活を研究の対象とする経済学は，存在の必要性を持たないものとなるでしょう。私たちの現在の経済生活には，働くことによって安定する面と，それのみによっては安定しない面という矛盾した要因を，その中に併せ持って

います。経済生活の持つそのような矛盾を，私たちは経済問題と名付けます。

経済学は，この経済問題の起こる原因を解き明かして行くものです。

何故，働いても働いても，暮らしはゆたかにならないのでしょうか。それには，いろいろの原因が考えられますが，まず第一に，自然の与えてくれる資源の不足が考えられます。山間僻地と呼ばれるところに住む人たちは，肥沃な地方に住む人に較べて，より多くの時間働いても，その生活は，極めて貧しい場合があります。

しかし，このような形で，経済生活を貧困に導く要因は，第2の貧困要因である人間の創り出す技術（文化）の未熟さを解消する努力のうちに，取り除くことのできるものです。すなわち，自然はそのうちに，人間の生活に必要とされるものを充分に備えているのですが，人間がそのことに気付かず，過去数十万年の間，目前に与えられている資源に，自らの経験と判断にもとづいて，生活に利用しうるものを限定し，自然の資源の持つ真の価値を引き出す文化や技術の開発を遅らせてきたのであります。このことは，一方において，自然資源の浪費を促し，他方において，値うちの小さいものに，多くの労働を加えるといった労働の濫費という二重の無駄の繰り返しを行なっていたことになるのであります。そして，このことが結局，経済生活の向上を長い間停滞させてきました。

しかし，産業革命以後，機械が発明され，それに伴う生産技術の画期的改善と生産量の飛躍的な増大が見られるようになった近代にあっては，科学技術の進歩もまた著しく，自然に働きかける文化の歯車は心持よく回転し，そこから生産される新しい生活資料は人々の暮らしをゆたかにし「一世紀前には，金持でも享受できなかった楽しみや便宜を，普通の人でもえられる」（ガルブレイス）ようにしています。

それ故，現在を「高度大衆消費時代」（ロストウ）と名付け，「大衆消費社会」（カトーナ）と呼び，「ゆたかな社会」（ガルブレイス）と命名します。ここでは，もはや，私たちの経済生活の向上を阻止するものはなさそうにみえます。

しかし，現在の世界において，依然として経済問題はあとを断っていません。それどころか，ますます「世界は飢えている」（サルトル）のであり，「豊富の中の貧困」はいたるところに，その形骸を現わしています。

ここに，第3の経済問題というテーマが浮かび上がって来るのであります。

経済問題を発生させる第3の要因，それは経済生活をめぐって発展される人と人との関係（社会関係）の中にひそんでいるものです。経済学は，まさに，この社会関係の真只中から起こって来る経済問題を究明する社会科学の一つであります。

以上，要約すると，経済学が，その研究対象とするものは，経済生活であり，その中に起こって来る矛盾要因（経済問題）を解明することを目的とするものであります。しかし，その場合，如何にすれば，それを解決できるかの問題ではなく，経済問題が何故起こったかの原理を明らかにすることであります。

2. 経　済　生　活

経済学の対象は経済生活であると述べてきました。では，経済生活とは何でしょうか。それは，人間が生きて行く上において，必要とされる財貨を調達するために取り行なうもろもろの活動であります。これを経済活動といいます。経済活動は，直接，その生命を維持するために財貨を消費する消費活動（消費生活）と，消費に必要な財貨を手に入れるために，自然

およびそこから得て来た資源に働きかける生産活動（生産生活）の二つに大別することができます。また，このような活動の社会的形態を経済現象ともいいます。経済現象には，消費・生産・流通・分配・交換と名づけられる部面があります。

「むかし，むかし，あるところに，おじいさんとおばあさんがいました。おじいさんは山に柴刈りに……」で始まる私たち日本人にはなじみの深い昔ばなしの背景になっている経済生活は，自給自足といわれるもので，その経済活動は，家庭と呼ばれる一つの小さな集団の中で，それに属する家族の者が欲しいと思うものを生産（採取）し，それを消費（使用）するという形で営まれてきました。それ故，ここでは，生産活動も消費活動も，家庭を中心とした一つの意志（主体）によって，取り行なわれていました。

しかし，経済活動がさかんになるにつれて，生産の形態も，狩猟・漁獲・牧畜・農耕・加工などいろいろなものが起こってきて，それぞれの家庭では，自分たちが今まで消費していた以上のものを生産できるようになり，各家庭は，互いに生産した物を交換して，消費生活を高め合うようになってきました。つまり，あらたに，経済現象の中に，交換と呼ばれる形態が加わってきたのです。交換がすすむにつれて，次第に，家庭毎に，最も得意とするものを専門に生産する社会的分業が起こってきました。ここでは，財貨の生産は，従来の家族の欲望を満足させるためだけのものから，交換を目的とした売るためのものへと変化してきました。このような生産を商品生産といいます。商品生産が普及してくると，消費生活も当然，他人の作ったものを買う商品消費が一般化すると共に，次第に，内容豊富なものになってきました。

商品生産は，経済生活を一変させました。ここでは，今までのように，生産から消費までの経済活動が，一つの意志（主体）によって取り行なわ

れるのではなく，生産生活と消費生活は，それぞれ異なった目的で，異なった意志（主体）によって営まれるようになってきました。

すなわち，消費生活は，主として，家庭を単位とする消費主体（家計）によって，家族の生活福祉の増大（欲望の最大限の充足）を目的として行なわれ，生産活動は，企業と名づけられた生産主体によって，資本の価値増殖（最大限の利潤追求）のために，営まれるようになりました。ここにおいて，消費主体（家計＝消費者）も，生産主体（企業＝生産者）も共に，それぞれの目的を達成すべく努力すればするほど，互いに抵触し合う者となってきました。なぜなら，家計にとって自分たちの家族の生活を良くするためには，購入する商品はできるだけ安価なことが望ましく，一方企業は，利益を多くするために，その販売する商品をなるべく高くするように配慮するからです。更に，このような矛盾・衝突は，単に家計と企業の間のみならず，家計と家計，企業と企業の間にも起こってきます。

商品生産社会では，このように広く経済活動を営んで行くなかで，人と人とが，その利害をめぐって，対立抗争せざるを得なくなってきます。それ故，商品生産社会は，各経済主体が，それぞれの経済目的を達成するために，互いに競争し合う自由競争の社会ともいわれています。このような経済社会にあって，経済問題をさぐり，その起こって来る要因を解き明かして行くには，経済生活における主体間の関係（社会関係）に着目し，社会的な経済活動の実態を把握しなければなりません。

経済生活を社会的な経済活動として把え，そこで発生する経済要因を探ろうとするならば，先ず，各経済主体に共通するものを探し出さなければなりません。

私たちの経済生活において，全ての経済主体に共通するもの，それは，今日の生活の安定と，より良い明日の実現といえましょう。

ところで，経済生活の安定と向上は，商品生産と貨幣経済の一般化している私たちの社会では，貨幣所得の大きさによって決まります。それ故，社会的な経済活動は，誰しも先ず，貨幣所得の獲得維持を第一目標として行ないます。ここに，一般的な風潮として，経済活動を研究の対象とする経済学が金もうけ（貨幣の獲得）のための学問であると考えられる根拠があるわけです。

ともあれ，人々は経済生活の安定と向上という原則にもとづいて，できるだけ多くの貨幣所得を手に入れようとして，いろいろと工夫し，苦心し，努力します。ある人は朝早くから夜おそくまで野良に出て働き，ある人は新しい財貨の製作方法を発明し，ある人はそれを製作し，ある人はその販売を行ない，ある人は財産を運用するといったように。これらの努力は，それぞれ個人的な形で続けられますが，多くの場合，その人の努力や希望や意志の通りに成功するとは限りません。ある時は予想以上に成功することもありますが，それ以上に，全く予想に反した結果になることもたびたびあります。

何故でしょうか。それは，前にもみたように，商品生産の下にあっては，経済生活は社会的な形で営まれており，貨幣所得もまた，必ずしも個人の意志によって決まるものではないからです。それは，彼がおかれた社会の，そのときどきの経済的，社会的条件によって決まるものだからです。

人々の経済活動がこのように社会的に規制され，個人的な努力の大小によって，経済活動の成果を期することが小さいことに気付くと，しばしば，人間的な努力の拠りどころを見失いがちになります。彼が，良心的であろうとすればする程，不安にみち，焦燥感に駆られた生活を余儀なくされ，多くの人々は，その不安と苦悩に打ちひしがれ，没個性的な無気力，無自覚な暮らし，刹那的な生活に落ち込んで行く傾向があります。これは，現

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com